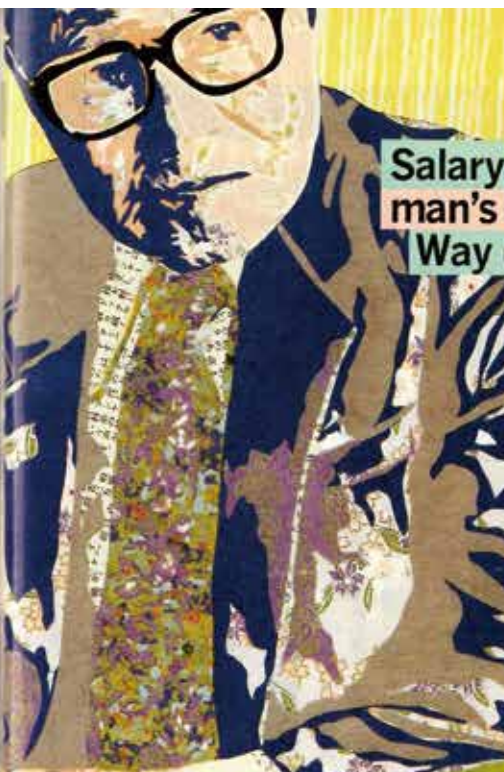


### ミドルの履歴書

## Salary man's Way of Life



野田泰博さんは外資系企業に勤めながら町議をしている。年間二〇日の有給休暇を、四、五日の欠勤で議員活動をこなす。サラリーマンがまず市町の政治に関心を抱くのは、日本の社会が変わっていくという。

あなたは「市民」だろうか？ 日本人で市民といえる人がどれだけいるだろうか？

〇〇市の住民ならば、確かに〇〇市民と呼ばれる。だが、それは「〇〇市の人」であって、市民として生きていることを意味しない。

「市民税を払っている、だから市民だ」……、はたしてそう言いきれるだろうか。県市民税と、自治体の税は一緒に呼ばれている。それでは県民税を納める県民と、市民税を納める市民と、さらには国税を納める国民としての貴方との二者の間隔はどうなっているのだろうか。西欧の歴史から言えば、都市コミュニティの一員としての市民がまず成立し、その上に国家が被さって国民としての意識を強いた。だから、まず市民としての自分があり、その向こうに国民としての自分を感ずるということになる。だが、私たち日本人はそうではない。

### 連載第31回 サラリーマンで町議

# 町議になるため転職した団塊の世代の面目躍如

ノンフィクション作家・野田正彰

ましてや、四六時中、会社員として生き、遠く駅に帰るところ、休日を通り過ぎたところがある。〇〇市では、市民とはいえない。近代都市の市民とは、個としての自覚をもち、自分が生活するコミュニティの公益に参加する義務の意識をもった人である。

今、東京都の外側、千葉県や神奈川県の一部で、経済活動だけで生きてきた人々が、生活のなかに政治や文化を取り戻そうという動きが見られる。個としての自覚が弱く、生活とは働くことだけではない、と問い返しが行われつつある。それはかつての東京都内、移住や世田谷の住民が先導した進歩的住民運動でもなく、あるいは公害地域の住民が健康を守るために取り組んだ抵抗運動とも異なる。巨大なボリュウムで戦後の経済成長と豊裕化を突き抜けた団塊の世代が「競争で動くだけではつまらないではないか」と問いかけた結果、芽生えつつある市民運動だ。

### ゼロヨン族に芽生える市民運動

野田泰博さんは、サラリーマンとしての経済活動も、町会議員としての政治参加も、利根川の恵まれた自然のなかで遊ぶことも、あわせて生きようとする「愉快な世代」のひとりだ。

りである。一九四七年生まれ、今四七歳の彼は、メガロポリス大東京の外縁にマイ・ホームを持つ中年世代を「ゼロヨン族」と名付けている。東京都内の〇三の電話番号に対し、〇4で始まる市外電話番号をふられた地域、西の鎌倉、逗子から始まって、埼玉、千葉県の各市町へと、東京を囲むドーナツ地帯が〇4である。ここは七〇年代後半、三〇歳代の団塊の世代がまだなんとか土地を買った地域でもある。

野田さんは、「ここに我々の団塊の世代がゴマンと居るんですよ。何んでも群れたがり、「来い、来い」と言われちゃう。僕なんかその典型的の、団塊の世代が住んでいる。この東京ゼロヨン族が、地域活動に関与していく起爆剤になると面白いな」と主張する。ゼロヨン、……いかにも東京の会社から、都心の街角から、自宅に〇4で始まる市外局番を回して「お父さんはこれから帰るからね」と電話をかけるサラリーマンらしい発想だ。

彼の経歴で特異性を見せるのは、中央大学法学部の学生時代、休学しての三年間のドイツ留学である。ドイツへの関心は、小学校の先生の影響から始まった。先生は生徒それぞれに調べる冊子を振り振って、関心を持たせた。彼の研究対象はドイツとフィンランド。このときから少年は「ドイツに行ってみよう」と思いつくようになった。

高校時代、ラジオ講座でドイツ語を勉強しているうちに、英語よりも好きになった。それに個人的なエピソードもある。

「好きだった女の子が英語の先生を想っていたんです。格好の良い男の先生でね。この野郎、なんて対抗意識をもったか」

外交官になりたいと思って法学部政治学科に進んだが、折しも大学闘争期、授業はほとんど無かった。そこでゲーテ・インスティテュートに通い、ついでハンブルク大学のドイツ語夏期講座を受講するために、憧れのドイツに渡った。そのまま後はハンブルク大学に残り、二年間、ドイツ語の勉強を続ける。

「正式の学生でないので奨学金は受けられなかったけど、寮長になって八〇マルクの寮費をただにしてもらったりました。ハウスマイスターというので格好いいなと思ってなつたら、地下室に這いつくばって石炭をくべないといけない。一度入ると、耳の穴から、目から鼻まで真っ黒でした。それから、窓が壊れたというので、夜中でも行ってすぐ直さないとイケないんです」

こんな体験はすっかり忘れていたが、二〇年ぶりの町議の仕事に結んでいるのかもしれない。こうしてハンブルクで生活するうちに、彼は自分がいかに無知か、思い知る。政治学科の大学生なのに、日本の衆議院と参議院を説明せよ、と言われてもよくわからない。それで、七〇年の

大版万国博の通訳として帰国した彼は、学園紛争もようやく終わったカルテュ・ラタンの大学に復学した。

結局、七年間の大学生生活をしたことになる。復学して専門の勉強に打ち込んだが、通訳としてもよく働いた。ドイツ大使館にも、西ドイツ政府の商務省にも通訳として登録されており、ミュンヘン・オリンピックにも、自治省が後援していた世界青少年交流にも、何度となく同行した。一週間でサラリーマンの数倍のアルバイト料を稼いだ。婚約者への指環も、卒業してすぐの結婚式の費用も、通訳の収入にまわるものだった。しかしその内には、通訳の仕事に落ちてはいけなさと、強く思うようになった。

「言葉だけ訳しては駄目だ、心と心をつなげなければいけない。そう思っただけで、しゃべって通訳したり、相手と口論したこともあります。そして、ドイツ語は特技として取っておき、ドイツ語とは関係ない仕事にしようかと真剣に思うようになったんです。商社なんかじゃなくて、メーカーに入って泥臭い仕事をやるのならば、それでもよし、と考えたんです」

彼はドイツ商社と衆議院に関連する会社の誘いを断って、あえて大阪に

本社のある鐘澤化学工業に入社したフリーターになっていく自分に、真面目な重りを下ろさうとしたのである。この心理的プロセスは、最もサラリーマンらしいサラリーマンになろうとした、連載第七回の立石さんによく似ている。だが、一年後にはベルギー工場に派遣され、以来七年ぶりに海外暮らしとなった。

帰国後、東京に転勤となり、ここで千葉原栄町と出会う。横浜の一等地、書架台の住宅に住んでいたが、三人目の子供が生まれ、家が狭くなっていた。

「住宅時代は社畜そのものでした。会社から皆でワーッと飲みに行っても夜中の一時、二時までやって、最後にはあるバーに皆が集まってきてタクシード、住宅に帰り、あくる朝

## ミドルの履歴書 Salary man's Way of Life



また会社に行くという毎日を送っていたんです」  
ドイツやベルギーでの生活が長かった野田さんだが、必ずしも会社人間の生活は嫌でなかったようだ。というのも、ドイツから帰国した学生さんのとき、最初のカルチャー・ショックを味わい、そこから学ぶことがあったからだ。  
「日本人は外国に行ったときにカルチャー・ショックを味わうのではありません、帰国したときに味わうのではないかな、日本に帰って、「何でこんなことがわからないんだ」と涙を流したことが、何度となくあります。  
例えは簡単な話ですが、ホテルで「ゆで卵が食べたい」と言っても、「うちには目玉焼きがスクランブルで、ゆで卵はメニューにはありません」と断られる。ゆでればよいのに」  
「ここには融通が効かないのではなく、「全体に合わせる」という集団主義が作動している。野田さんは帰国後カルチャー・ショックをへて、「ここは日本だ」と反省し、上司に相手に合わせる訓練を積んだという。  
**群をなし、縄張り意識の強い団塊の世代**  
いずれにせよ、八三年、家を探して千葉のはずれまでやってきて、利根川、長門川、印旛沼の水郷がす

かり気に入りに、栄町の住人となった。カヌーつきマイ・ホームの誕生だ。  
初めて、自治会の付合に加わる。「会社の肩書きや地位を離れた近隣の交際がこんなに面白いのか」と彼は驚いた。  
「一年前、私が来たころ、九〇〇〇人の町が、今は二万六〇〇〇人になっている。八〇年のころに、家を買って入ってきたのは団塊の世代なんです。私たちが会社から借金して買える家は、すでに通勤一時間圏、私も一四〇〇万円で買いました。こうして、三五歳前後の連中が一挙に入ってきたんですね。  
その連帯感の熱気、さらには自治会ごとの縄張り争いのすごいこと、新しく「安食台祭り」二百回生主権というのを始めると、二〇〇〇人、四〇〇〇人と集まるんですから、これが「新住民の手作りのお祭りなの？」とあきれるくらい賑やかなんです。矢含まで自分たちで組んでね、それから、お正月にはお餅つき、秋は文化祭、お年寄りの慰労会をやったり。二月になると「火の用心」で皆で回ったり、ね」  
顔を輝かせて野田さんが語る栄町物語は、まさしく団塊の世代が作った群生活の再現だ。当然、スポーツ・クラブも盛んとなり、野球、卓

球、テニスと、男女ともに興じている。また、農家から三〇坪ほどの畑を年間一〇〇〇円ほどで借りて、野菜作りに熱中する人も多い。  
この熱気は、七〇年初めに出来た東京の多摩や大阪の千里などのニュータウンと異なるところである。昭和一斤から学童疎開世代は、もう少し気どっている。  
しかし、戦後のベビー・ブームでいつも生まれながら生きてきた世代は、群をなすと同時に縄張り意識もすごい、と野田さんは感心する。  
「行政が線引きした区域ごとに、安食台、丁目自治会とか、三丁目自治会とかが出来ているんですが、その縄張りごとの対抗意識はすごいんですね。男は念所者が混入のを排除しようとする。また、安食に入ってくるのが半年遅っただけでも、「あいつは新住民のなかでも旧に属する旧新住民だ、あいつは新住民のなかの親だから新住民だ」なんて、二分しているんですよ」  
こんな熱気もテリトリー遊びもふくめて、野田さんは栄町がすっかり好きになってしまった。胃腸の手術をした父親にも助めて、「味噌汁がさめない近所に引越せよ」と、「ここを離れたくない」との思いは強く、勤め先も、北米プロジェクトで再び海外勤務の可能性があった鐘澤化学

を辞め、外資系のヘキスト・ジャパンへ移ったのだ。課長として招かれ、給与も上がり、栄町での付き合いも楽しく、すっかり生活に満足していた。

## 仕事と政治活動のバランスを築く

まわっているうちに、栄町で「ふれあいプラザ」という豪華な文化多目的施設を建設する計画がおこり、彼は「今、この町に本当に必要なの？」と疑問を持ち、町議会の傍聴に行った。七〇億円ぐらいの町予算に対し、一〇〇億のプロシエクト。老人医療とか、保健センターとか、もっと充実することがあるのではないか。私が払っている税金なのに」という思いがあった。  
「まず、議員に意見を聞いて回ったんです。そうすると、ほとんどの議

員が「あれはおかしい」「反対だ」と答える。  
ところが議決の議案に傍聴に行くのと、彼「賛成」と起立している。「話が違ふじやないか」と言うと、「あの場面では賛成したが、後で反対もできる」と説明してくださる。これではいかん、私たちは何も知らなすぎると、思ったんです」  
日本の村社会の決定とはそういうものだ。六、七割が賛成となると、内心反対でも、多数に付いて満場一致に流れる。意見が割れるのを恐れ、表向きの一致をつくろう。そのために、常に主流はどちらなのか、見きわめに敏感である。村社会の決定原理は、日本のすべての組織に通底しているのだが、会社のなかでは金メッキされて隠されている。野田さんは、町議会で露骨にそれを見せつけられ、憤慨したのだ。そこで町

議会議に出る決心をする。  
「私は人に拒がれたり推測されるのは嫌なんです。「僕がやる」とまず言います。だって、議員の最大の楽しみは、公的な場で自分の意見を思いきり言えることでしょう。「俺たちの税金を使っているんだ、だから言わせてもらおう」と、もうこの一言に尽きますよ」  
ゼロヨン族の面目躍如だ。だが、サラリーマンで町議の道は簡単でなかった。外資系のヘキストでも「社業に無関係」と許可されなかった。そんなところへ競合会社のフェシブル社のダンテ・マートイン日本支社長から、ヘッドハントの誘いを受けた。野田さんが町議立候補の可能性を尋ねると、民主主義の国スイスで、サラリーマンでありながら州議会議員を務めたこともあるマートインさんは、「政治は国民の義務」とあっさり

許可してくれた。  
彼は会社を移り、九二年に町議選挙に立候補。当選。今は年間一〇日の有給休暇と、公務のための欠勤（四、五日ほど）を使って、市民としての政治活動が続いている。彼は有能なサラリーマンであると共に、地域の自治にかかわる町議として生活することを大切にしている。  
「会社のお客さんに町議会のことを話します。「それで、どうなった？」とすごい関心です。サラリーマンがまず市町の政治に関心をもち、そこから、日本の社会が変わっていったらいいのです」とおっしゃっている。  
団塊の世代もいっているところがあるなと、じつと感ぜさせられる中年男がここにいます。  
筆者の海外取材のための「ミドルの履歴書」は7/27・7/16号まで休載させていただきます。